

我々の自らは農民黨——地方政黨——の組織に着手し始め、我々の  
組織はまさに、拾遺す可からざる大海に陥らんとして居た。然も  
我々の組織は益々加増し、我われが組織なる階級を講じないならば  
全歐幾千度の労働者と農民と無産市民を、黨分の内、その生活を自  
由を衝きに敵の旗りにまかせなければならぬ様な危機に迫りし  
て居たのである。その時に我々が自分自身の手で、自分自身の組織  
を樹て得る方法は、自ら農民黨を樹立する以外には、既に  
無効な方法がなかつたのである。

(二) 無論我々は、農民黨の候補も、その現況も充分承知し  
て居たし、又、何等プロレタリアート黨の指導を受けることなくし  
て、我々が我々自身の政黨を作つたことが、原則上間違ひであるこ  
とも充分承知して居る。だが我々が組織を排して、農民黨を樹立し  
たのは、まさに、上述の如き極めて特殊な場合だつたのである。  
それでも尚、農民黨を樹立したことが間違ひだつたとする可きであ  
らうか。否！ 斷じて否！ 我々は當時の客觀的状況の下に於て  
我々が自ら農民黨を樹立したことは、我々が、あの場合我々に課せ  
られて居た階級的義務を忠實に履行したにすぎないのであつてそれ  
をたゞしかつたといふことを主張するのには、何等辯解する必要はな  
いのである。

(ホ) その後、我々とプロレタリアート黨とは、全く對立して居  
るやうなカテゴリーになつて居る(現實に對立して居るのではなく、  
對立して居る、と懸念されて居るのだ)だが我々はそうした状態が  
必ずしも不協的だとは考へて居ない。相対的に、労働者農民無産市  
民の利益の爲に眞面目に働いて居るものとするならば、左翼黨管内  
に、さうした馬鹿／＼しい對立が長く続く筈がないのであるから。

(ル) 此問題は、あく迄現實的な具體的な問題である。プロレタ  
リアート黨が、殆んど眞實に近きまでに破壊された時、後に發せられ  
たコミニニストが、あく迄組織的にレーニン主義的組織方針に従ひ  
て、工場細胞の基礎の上に、再び組織の如き黨を築き上げて行くか  
うと考へるならば、そのコミニニストは、何よりも殊に大衆闘争の  
義務を自ら計置し、若くはそれが組織にまき込まれることを希望す  
るに相違ないのだ。プロレタリアートの黨は、机上の空論や、職  
中の理論や、座談會や、研究會や、戦線一派のお坊ちゃん連中の  
やつて居るやうなお祭風き式宣傳の中から生れるものでは斷じてな  
い。(そんな方法で黨の擴大が出来るくらいなら吾等はないのだ)

プロレタリアートの黨は必ず闘争の中で組織の如く眞固に築き上げら  
れて行くに相違ないのだ。だから、問題の中心點は、當面の客觀的  
組織的條件の下に於て、農民黨の組織があつた方が、よりよく大  
衆闘争を樹立し得るか、農民黨の組織がなかつた方が、よりよく大  
衆闘争を樹立し得るか、の一點にあるのだ。(當時、一部のインテ  
リは「農民黨が出来たらば、大衆の信心がそちらに向つてやつて  
プロレタリアート黨の再建の邪魔になる」といふやうなことを主張  
してゐたが、さうした議論こそはプロレタリアート黨の性質を全く

我々の利益の爲に眞面目に働いて居るものとするならば、左翼黨管内  
に、さうした馬鹿／＼しい對立が長く続く筈がないのであるから。  
(但し、この事は、我々が一歩引取りのストラとの抗争を停止す可  
きだといふ意味では勿論ない。)

(ハ) 第二の反對論は「農民黨の全黨員は、農民黨に立てこもる  
よりは、寧ろ、プロレタリアート黨の再建、擴大、強化の任務を死  
死的に遂行す可きだ」といふ點である。

(ト) この點論は、一應尤もな點論である。プロレタリアート黨  
が破壊された場合に、左翼黨管内に於て、その再建が第一に要求  
されるといふことは、餘りにも當然のことである。だが、プロレタ  
リアート黨の再建、擴大、強化の問題は、その組織原則から見  
て、寧ろ、選ばれたるコミニニスト——階級的革命家——の計  
劃的行動によつてのみ解決し得られる問題であつて一般大衆の手によ  
つて解決し得られる問題ではない。

(チ) だから、農民黨——それは明かに大衆團體である——の全  
黨員に、直接にプロレタリアート黨再建の任務を負はせやうとする  
やうな方針を取ることは、明かに誤謬である。(この事は左翼組合  
の場合にも言へる)若くはさういふ方針を取れば、左翼の全團體  
が混亂に陥るだけであつて、プロレタリアート黨の再建の爲には、  
却て悪い結果をうむに相違ないのである。

(リ) だから、農民黨の全黨員に一體にプロレタリアート黨再  
建の任務を負はせやうとして——既述の點論は、一時たしかに、さ  
うした點論を犯した——その爲に農民黨の樹立に反對し、若くはそ

再建してゐないところの事も考へよ。小ブツの點論である。  
(ヲ) 然し、農民黨は、階級的の理由から現在黨内らしい大衆闘争  
を樹立して居る。だが、階級的労働時代比べて、農民黨  
の樹立以來、遂に活潑な、遂に眞實な大衆闘争が展開されるやうに  
なつたことは、疑ひの餘地のない事實である。殊に今後は、農民黨  
の努力によつて、益々強力な大衆闘争が展開されるやうになると我  
々は確信して居る。それが、プロレタリアート黨の擴大、強化の邪  
門になるといふやうな心算は、現實の闘争場面からカケ離れて居る  
階級的な小ブルジョア共の餘計な心配に過ぎないのだ。

(ワ) 第四の反對論は「我々は農民黨の存在が、日常闘争の展開  
に役立つことを疑はる。だが、それによつて、農民黨が擴大される  
ならば、それは、革命の前夜に到つて、必ず反對化するに違ひない  
だから、我々は農民黨の存在に反對する」といふ意見だ。

(カ) この意見は、我々の運動を發展の見ることをしないとい  
ふの點論的、形式的論理の一種型だと思ふ。

(コ) 我々は、革命の前夜まで農民黨を存続せしめることが必  
要だなどとは、曾て、主張したことはない。我々は、當面の極度に  
特殊な情勢の下に於ては、本質的な農民黨を持つことが絶対に  
必要だと主張して居るだけであつて、やがて、我々は我々の組織が  
ある程度まで通常の状態に復するならば遂に「労働政治闘争同盟」  
を樹立して農民黨を放棄すべきだと考へて居る。これは農民黨の全  
指導者が最初から承認して居るべきことである。

(ク) だが、か言ふかも知れない。「農民黨が擴大、強化され